八百屋お七

八百屋お七

上卷

作者　紀海音

蹠下リカ木の端と誰が片意地な筆ずさみ。それは浮世を捨て坊主。是は煩惱。ナホスフシ菩提所の。寺は華麗の。大書院。唐戸數子戸違棚。掃きちぎつたる島幣塵に交れど法性の。水は濁らぬ瀧川の戀に小性の吉三郎。遊びがてらに挽く茶臼。眠たからうと人目には。スエテ見えて寢もせぬ憂き事に。フシ花の姿も萎れ行く。君をこい茶に口切の。主は誰樣。お七樣 長地立つ名はげにも本郷の八百屋の花柚松茸の蕾も何れ初物の。緣はをかしや假初の。過し火難に此寺へ。親子主從厄介の內のもや〳〵氣も付かず。普請も出來て鴛鴦のつがひつれなき水離れ。スエテ立つても居てもあられねば。せめてお顏を拜みにと。親の跡追ふ寺詣り。釋迦も見許し玉鉾の。道の搔取押下し。襟繕うて體やつて。座敷へ出づれば君が顏。見るよりはつと氣上りし。詞ナウ杉や。もうおじや何と去ぬまいかと。地色髮を弄ひつ手を撫でつ。フシもぢ〳〵するももどかしく。詞ハテまあ初心な何ぞいの。親御は後生願がひにお前は小性ねらがひに。地あたふたと取急ぎこんな尊い首尾へ來て。あかりの戀が初めでも何が差かしござんすと。背中をついと押遣られ倒け掛るのを機にして。とんと後へ凭れ寄り。フシ手傳をかへと手を取れば。地色吉三郎振返り。地ハアハお七樣お久しや。道も忘れず今日の御參詣は奇特なり。然し御親父久兵衞樣お袋樣は二時も。先から參つてござるのに跡へ下つて何ぞ又。味な趣向があつたもの。聞けば每日堺町木挽町への御遊山に。歌舞伎若衆の美しい姿でうまい狂言を。地御覽じた目

でわしなどが抹香ばかりとめ袖に。飽きの來たのは御尤も戀のいろはを敎へても。手が惡ければお師匠を變へて嫁入遊ばすげな。目出度い事じやと。フシ氣を持たす。地色お七は流石正直の顏を赤めて涙ぐみ。誓文くされ何時からか芝居へ足も向けませず。心に立てゝ牡猫さへ膝に抱いたる事もない。こな樣こそは方々から女子の弟子が附いたやら。詞ちつとの內に大人びて。小面の憎い此口がわしは因果で可愛いもの。地何處へ嫁入をするものぞお前はやがて坊樣に。ならしやんすとの取沙汰が氣掛りでならぬ故。互の固めしよう爲に。コレ起請をと差出す。吉三郎はやがて戴いて忝い〳〵。兎や角言うたは皆僞り誠を見する誓紙をば。只今致して進ぜうと棚より料紙硯箱。筆押取つて書く所へ。新發意常香盛りさして。後の方に立覗き。詞コレ吉三郎樣何さしやる。上人樣の曼陀羅を遊ばす筆で勿體ない。地穢はしいと咎められ。はつと下に差置いて。詞ハア辨長。そなたは先から其處に居て樣子は何も聞きやらぬか。お七樣の仰るは。曼陀羅が欲しけれどお師匠樣へは憚りな。身どもにとのお望み故書かうとしたが何とした。ヱヽ如何にもそんな事さうなが。お七樣から遣らしやつたは。淨土の一枚起請とやらっ有難さうに戴いてこなたは宗旨替へる氣か。地色曼陀羅書くとおしやれども。フシそりやあんだらと笑ひける。地色お七はやがて手を取つて何時見ても〳〵。可愛らしい坊樣じや巾着でも紙入でも。欲しくば縫うて進じよぞや。一寸見たこと聞いたこと言はぬものぢやと賺せども。なか〳〵頭打叩き。詞愚僧今年十二歳出家の道を相守つて女の手から物取れば。五百生が其間手の無い者に生れます。又嘘つけば獄卒が鐵の鋏で舌を拔く。それでは日頃好物な球琉芋が食はれぬと。地こま付けられず立去らず。取付く蟲の辨長や花の嵐と持餘す。地色杉は捕へ出來ました。詞目に入る樣なお前でも出家。侍佛の使者。位の高いお人ぢやが。それでも此處へたつた今幽靈が出ましたら。怖しがつて泣かしやろがの。ハアねつな事をば言やるなう。其幽靈を浮めてやる。地胸に納めた法華經の。八官町の比丘尼のちと棺桶の詰つたが。迷ひとなつて幽靈がそこな丸太の間から。出たを深達罪福相浮めてやつたと意氣過ぎた。地習はぬ經の談義口悉皆當樓那の辨長

樣。詞是からわしが咄さうと膝に抱寄せ聞かしやんせ。こちの隣に分限者の造り倒れがあつたげな。男は去年の正月に初の子産んで死なれたげな。跡で後家御が騙られて傾城狂ひをしられたげな。揚錢の魅入りにて節季と言ふ鬼になり。地慾に眼が光るやら身代に尾が見ゆるやら。額に江口倉橋の大根程な角生えたを。くき桶に入れ其家のはしりの脇に埋んだげな。其執心で夜々は屋鳴震動雷電し。天井板がむち／／／。コハリ梯子がぐわた／／／。四方の壁がどろ／／どろ。詞モウ此話置いてたも。どうやら面白なささうな。ハテまあ跡を聞かしやんせ。又膳棚がぐわら／／／。庭の薄がざわ／／／。明障子がぼうつと燃え。其中から幽靈が白佛程化粧うての。お齒黑は烏羽色髮打捌き逆に。屏風の陰ににようこりと。顏差出してけら／／けら。ハ、、、ハツト笑うたげな。家内の者が一時にワ、／／／ワツト目を廻せば。小坊主は狼狽へて彼方へ向けば向ふから。又其顏がにようと出る此方へ寄れば後から。毛の生えた手で撫で廻す仰ぬけば二階から。俯けば簀子から。フシ是はならぬと逃げ廻り。地吉三が袖に顏差入れ法蓮華經も本道も。付けう藥のない首尾を杉が氣轉の手療治に。ひん抱へ來て風呂敷の小袖を取つて辨長が。顏に起請を早々と。先づよい事を書院先。硯を取つてくれ緣より。フシ濡緣あるこを嬉しけれ。地色互に向ふ顏と顏あちらに抱けばこちらにも。恐しがりて抱き付いてお題目よりお經より。如是本末や屈竟の子供を騙す方便品。膝の間より坊主首によつと出して見た／／／。おりや見付けたと駈寄るを杉も續いて走寄り。其處を彼の幽靈が後より引掴み。なう怨めしやそち故に。多くの屋内が世話を燒く。小意氣過ぎたる小坊主めと。まつこの樣に抱帶くる／／／と目を卷きて。執念き蠻でやい其處な。詞二人の者はうつかりと何狼狽へて立つて居る。そちらではないこちらへぢや。地ハアテあちらへ目離りのない帶解く事も時による。つひちよこちよことねるものと。氣を付けられて頷いて。飛石傳ひやう／／と園の中に入りければ。さあ爲濟した幽靈も最早冥途へ歸るとて。搔消す樣に方丈へ　フシ逃げて。形はなかりけり。地辨長一人うろ／／と。詞杉こりや何とする事ぞ。地めんないちどりか合點ぢやと。座敷一間を舞ひ

歩き吉三殿お七様。杉々々と呼ばへども。返事なければ鉢巻を。そつと外してこりや如何ぢやと。あたりを見廻し打頷き起請を出して押戴き。詞一杯陷めたと思やろが其裏食はせこちらには。吉三の袖の内にあるこれしてやつたよい氣味ぢやと。地打笑うたる後には。萬屋武兵衛太左衛門先より様子を聞き濟し。新發意此處に何してぢや。詞ヱヽお二人様御詣りか。久兵衛様も先にから客殿にござります。地お出でと言うて駈行くを。アヽこれ辨長殿。詞こなだが只今戴いた文を身どもに下されい。ハテつがもない事ばかり。忝くも是はな。お七様と吉三郎戀慕れゝつの起請とやら。お前が貰うて何さしやるサア其お七と吉三めが起請ぢや故に貰ひ度い。其代りには常々に欲しい〳〵と言はれたる。木佛の大黒と布袋や歌留多一面ぢやが。地何とゝ背中を叩かれてこりや談合が面白いが。詞騙食はすのぢやござらぬかや。ハテ何の嘘をばつくものぞ則ち太左が請合ぢや。ムヽ歴々の證據人そんなら遣ろと差出せば。地武兵衛悦び請取つて是さへあれば此方の。戀は叶うた手に入つたと兩人呟き入りにけり。辨長は只一筋に武兵衛様必ずや。明日とも言はず晩からは六介が部屋へ行て。二文四文の博奕打つて釋迦に契を結ぶの神。お七が戀のにくずしと知らぬ。事こそ。　三重へ悲しけれ。地主從の因は流石深編笠用ありげなる侍の。玄關に佇みて頼みませうと言ひ入るゝ。折節住持は方丈へ吉三伴ひ出で給ひ。何人なるぞ用あらば此方へとありけるに。ハツト答へて編笠を。フシ取つて彼處に入りければ。ヤア。詞十内殿お久しい。先づ申さう御主人には。不慮なる事の御浪人。殘心推量仕つた吉三は親子の仲なれば無歎かうと存じたに。流石は學文精ど入れ出家に染まる程あつて。地世界は無常と諦めて頓着も致さぬ段さりとは奇特に存ずると取なしあれば十内は。詞滿悦至極の御言葉それと申すも上人の。日頃お示しあるいはれ就いては主人源次兵衛。浪人せしは何故とお耳へ入りしは知らねども。自分に於て一合も非道の沙汰は致さねども。若殿の御難儀を救ひ申さん爲ばかり。私欲の科を身に被り不時の虚名を受けたる事。更々悔み候はず。地色それにつけても吉三郎出家の願ひを只管に。貴僧様へ申上げ剃髪染衣の姿をば。篤と見屆け立歸れと。拙者を差越し候と。フヽ慇

勸に相述ぶる。地色上人暫し頷いて。苦勞の中にもそれ程に子は大切な物ぢやよなう成程々々今日にも。出家致させ申さうと悦ばしげなる返答を。胸に手を置く吉三郎。兎や角思ひ廻して眞中へずつと出で。詞ム、珍しや十内扨某が出家の事御師匠仰せある通り。心に待兼ね居つたるが今其方が話を聞き。忽ち心底翻り二度武士になる思案。先づ一通り承れ。父源次兵衞若殿への。忠義に浪人致せしを若殿御滿足に思召し。御身持直れば浪人せし甲斐あらん。然れども此趣大殿御存じなき時は。親たる人徒奉公をした道理。地某國へ立歸り隱れし忠義を顯す事。今日遁世致すより拔群の孝行と。言葉飾るも好色のフシ嘘に馴れたる證なれ。十内涙を袖に受け多くの書物を見廣げて。深き道理を思召す御所存感じ入つたるが。詞武士の作法は外の事。主の善惡顧ず討死するも世の習ひ。そこは差別はない所。お前が奉公お望でも不屈者の悴とて親殿御抱へなされまい。申し開きもならぬ筈。すご〳〵歸り給ふのは恥に上塗する同然。地色よく〳〵思し直されよと理を正せどもイヤ〳〵〳〵。詞身どもが勘當受けたのは大殿も御存じある。さあれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望むが誤りか。地何の遠慮あるべきと云はせも果てずこれ吉三樣。詞勘當を言立に御奉公あるこなたなら。孝行顏も入らぬもの。アヽ如何やらお前の御胸中紛はしうて呑込まれぬ。是も非も入らぬ發心をさあ。地成さるゝが成されぬか返答次第拙者めが。分別ありとにじり寄る。上人は聲を上げアヽ氣が短い十内殿。詞武道の仕儀は其許に如何樣とも捌かれい。法師の道は此方へ預け置かるゝ筈の事。數ならねども師と頼む愚僧が差圖致す儀を。吉三も否とは申すまい。地世話を燒かずとゆるりつと。心鎭めて語らしやれ。こりや〳〵辨長茶持て來い。非時も拵へ煙草盆酒よ銚子よさん〴〵の。中に立つたる御師匠の心〳〵遣ひぞ殊勝なる。地然る折節方丈より八百屋久兵衞親子連。續いて武兵衞太左衞門住持の前に會釋して。お暇申すと立出づる。エヽこりや各お歸りか。最前より此處に居て御挨拶もせなんだ故。武兵衞殿や太左殿は定めて酒が足りますまい。お客も心安い仁。ようござるわい遊ばしやれ。平に〳〵と止むれば兩人は立止り。詞久兵衞殿聞かしやつたか。御遠慮の無いお方とある然

らば序に今の事。お寺へお話し致しませう。ハテ武兵衛殿それはまあ今日に限らぬ事。地嘸や娘も連れたれば暮れぬ内に去に度いが。ござれと云ふも聞かぬ顔　フシ是非なく共に立戻る。地兩人は上人の膝許に畏り。御酒は望みに候はぬが急にお知らせ申し度き。いはくは是なる吉三郎。親御は名ある武士とやら。承れば大それた事仕出して。此頃追放せられたとも。縛首を討たれたとも口々の取沙汰故。親の子なれば如何樣の儀がござらうも知れませぬ。片時も早く暇をば遣されたら好からうと憚りながら存じます。ハア心遣ひは忝し先達其事は愚僧も聞いて居まするが。世間の沙汰とは裏表樣子は分けて言はれぬ儀。苦勞に思うて下さるな。ハ、、、、いやそれはお寺へ遠慮して取合せ云ふ贔屓口。其横着さ非道さは聞くも身の毛のよ立つ事。吉三は不便に思へどもお寺には替へませぬ。云うても御合點ないならば無理に吉三を引出すぞと。太左と身ども兩人が牒し合せて置きました。サア吉三立つて行けと傍若無人に罵れば。地住持顏色損じつゝ兩人存外千萬な。詞出家の弟子は子も同然。其吉三郎を我儘な雜言は何事ぞ。難儀が懸りや師弟共此寺を開く分。そなたの世話にやしますまい。お手前ばかりが旦方か不出來な差配と叱られて。ヱ、何にも御存じない故に御贔屓が一概な。お前は弟子と思さうが。地お七と言うてあれに居る。娘が吉三のお内儀樣フシ坊主の女房と嘲笑ふ。地久兵衛夫婦腹を立てそりや武兵衛殿何いやる。大事の娘を吉三には誰が仲人で嫁つたぞ。亀相な事は仰るまい證據を見よと立ちかゝる。はて喧しう云はいでもこちからお目に掛けるとて。件の起請取出し。コレ讀みまする聞かつしやれ。詞其方樣に御出家を。止めさすからは此方にも。嫁入致し候まじ。次に色々神おろしよし樣參るお七より。地何んとゝ云ふを聞くよりも吉三は袂打振ひ。はつとばかりの風情なり。お七はおろ〳〵涙ぐむフシ氣色もいづれ笑止なり。地久兵衛目鼻をしかめつく〴〵と打守り。疊を叩き身を震はし。詞やいそこな徒者。何時の間にまあ此樣な大膽な儀を仕出して。大勢の眞中で親に面恥かゝせ居る。すつぱのかはな若衆が。此久兵衛が僅なる家一軒を見込にて。仕掛けた戀に乘せられたな。地大痴め盜人めと彼方を睨み此方をば。引摺り寄せて散々に

打たるゝ杖の下よりも。お七は吉三を打見遣り。吉三は爰に居ながらに　スエテ消えも失せたき心なり。　地色住持は暫し默然と涙を隱し居られしが。やゝあつてこれ御夫婦。　詞全くお七に科もなく。吉三が　徒したでもなし科人は此坊主。お七が爰に居られし節。はれいたいけな發明な。娘の子ぢやと思ふから戯れ事を二三度も申した事の候が。サアア女は何處やら愚かにてまん誠かと某へ送らうとがな思うたを。　地しどけなうして拾はれて。無き名負うたる不便やと。衣に落つる涙こそ　フシ二人が。袖にわかるらじ。　地武兵衛はせいて大胡坐これお寺様。　詞御贔屓が餘り過ぎてむつとする。烏を鷺になされうが起請の文字は剝がされまい。これ御覽ぜと投出す。いや見る迄もないお手前が。最前讀んだ文言に。其方樣に御出家を止めさすからとはなかつたか。吉三は出家ぢやおじやらぬぞ。宛名に書きしよし樣は愚僧勿論吉祥寺。　地何と紛ひはあるまいと眞顏作つた　詞に。何れ誠と分き兼ねて。　フシ皆々。興をぞ醒しける。　地武兵衛住持を睨付けて。　詞これ御坊。女房狂ひをなさるなら魚も定めて參るであらう。幸ひ道で求めたる卵を是に持合す。　地お饗應を申さうと袖の内より取出し盃に打入れてサア。　詞お寺樣卵酒一つ參れと突付くる。何ぢや身どもに是飲めか。如何にもお七同然の八百屋の卵。參る氣か參らぬ氣かで眞實の。底を洗うて見る合點。ハテ疑深い男おやなう。佛祖をかけてお七への戀は僞りなけれども。邪淫は思案の外の事殺生戒は得破るまい。イヤ〳〵〳〵。何程佛祖をかけられても是を飲みやらにや何時迄も。吉三が垢は脫けられまい。ムゝすりや是非ともに飲めぢや迄。おんでもない事聞召せ。ハテ扨々是非もない。ハアげに昔も例有り鳩の秤に身を代へし佛の慈悲の古も。愚僧が今も菩薩の行此酒卽ち淸淨池。吉三が垢さへ脫けるなら飲んで見せうと引受けて。　地手に持ち初むる盃の朱を注いだる血眼に　スエテ涙は霰の如くにて。　詞武兵衛餘りむごいぞや。久兵衛夫婦は大切な娘に浮名立てられし。其腹立に如何樣な無理無體も言ふ筈ぢやが。　地寺旦の誼によしなにも取合せある筈を。難題言はるゝお手前が胸の中に物がある。　詞搜して見度いものなれども。法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の家を離れて七歲より。佛の前

に受戒して難行苦行師の苛責。誠に出家の文字の樣。住家と定む宿もなく。雨露霜雪に身を痛め此處に馴るれば彼處へ行き。或時は飢に疲れ。玄義文句に眼を暴し四十有餘の此頃は。色衣を着し敬ひも一宇の寺を司り。聖人とも云はるゝ身に卵酒を飲まさうとは。身どもが無間へ落つるならお手前は叫喚の。苦を受けうのが不便なわい。と云うて飲まずば聞かれまい。伊蘭の林に交れども赤栴檀の香は失せず。泥より出でて泥ならぬ胸の蓮は宗門の。七字の首題只今の妙法蓮華と一息に。ずつと干さんとし給ふを十内手を上げ待つた〳〵待ちませうぞや。待たう　地待たうと盃取つて彼處へ投げ。吉三郎を取つて伏せ。拳振上げ遠慮なく　フシ散々に打ちければ。ヤア家來の身にて推參なと一腰拔かんとする所を。透間あらせず二つ三つ足の下に踏み付けて。詞何が推參緩怠な。親の安森源次兵衞。地見忘れたかと懷中より骨桶出して差上ぐる、踏まれながらに吉三郎振仰向いてこは如何に。親仁樣は死なしやつたか。ヲヲサ〳〵エ、。詞問ふも語るも怨めしや。先月廿九日の夜御切腹遊ばされた。忠義とは申しながら御無念な御最期の。其中にても仰るは。言ひ置く事は外に無い何卒悴吉三郎が。出家相續する樣に　地くれ〴〵十内賴むぞとて。家來に御手を合されしお志の　フシいとほしさが。地骨に徹つてある故にお主を叩いた天罰も。踏んで奈落へ沈むのも身どもは何とも思はぬと。其儘其處に倒け伏して。フシ男泣きこそ。切なけれ。吉三郎は骨桶を手に載せて見つ膝に置き。エ、變り果てたるお姿と。スエテむせ入り〳〵消えかへる。地色十内やがて起直り。地骨桶を弓手に持ち怒れる顏も其樣も。別れし親の物言ひにて。詞ヤイ悴の吉三郎。源次兵衞が冥途から汝に尋ぬる事どもを。言譯あらば返答せい。形は人に生れても恩を知らぬは畜生よ。恩にも三つの品がある。差當つては親の恩。身を立て子孫を養育するお主の恩は猶重く。文字を習ひ目を開く師匠の恩は取分けて。地大海よりも亦深し喩を以て言ふ時は。親は子を憐めどお主には見替へぬ事。主は家來を養へど身に替へて贔屓はせぬ。師匠の恩は目前に汝が不義に代らんと。四十餘年戒行の譽も名をも顧ず。卵酒を參るのをのめ〳〵として見て居る事。畜生と云はうか腰拔者と云はうか。八逆罪の科

人めよ。詞次に此源次兵衛。假に勘當せし事某獄て若殿の。御爲に死ぬる覺悟故流浪させんも不便なり。亡からん後も弔はれ度く。少しの事を言立てに出家にならぬ其内は對面せじと此寺へ。追遣はせしは慈悲ならずや。其甲斐もなく今日明日と遁世を延ばす由。内々人の知らせし故末頼みなき悴めと。眞實の心になつて勘當はしたれども。自然法師に成るならば十内我に成り代り勘當も免して遣れ。骨になるとも懷しき顏に對面致させよと。地頼みし手前も恥かしき非義非道なる性根にて。親の爲に奉公せう武士に成るのが孝行とは。ようも汝はぬかしたと。一度は怒り一度は又打萎れたる物腰に。それはと答ふ言葉なく。身を知る。雨やさめ〳〵と　フシ泣いて。俯向き居たりけり。地色十内涙押拭ひ。詞親且那の御意見が篤とお耳に止つたか。是からは又十内め推參を顧ず。一言申し上げますと飛退り手を突いて。申し吉三樣善と惡とは北南足振變ゆる迄の事。それ程の義は言はいでも辨へのある御發明。殊に短慮なお生れつき。家來の者に人中で踏まれた事の無念なと。定めて遺恨に思すであろ町人づれの口先に家一軒を見込ぢやの。いや盜人のすつばのと言ひ散されてきよろりつとうぢついて居る人ぢやない。コレ徒といふ大病に勇も武略も拔けましたの。昨日迄も今日迄もの。千石取の御一子と崇め育てし此方をば。雜言せられし其時は。舌切り裂いて棄てうかと刀の柄に二三度も。忍びに手をば掛けたれど。いや〳〵。自分相應に大事の娘を犯されて腹の立つが道理ぢやと。のめ〳〵おきて十内も腰拔けになつたぞや。家來の恥は此方の恥。お前の恥は親御の恥此世で不孝し足らいで。又未來迄なさるゝか。慾心でない言分にさつぱりと暇遣らしやれ。地どうぢや〳〵。サア。〳〵サアとせはしなく。問ひ詰められてうろ〳〵と覺えず其處へ流す目に。お七は顏を振袖の下から手にて物言はす。否にもあらず稻舟のおうとも得こそ言はれざる。十内二人が口無しの色にぞいでの堪り兼ね。つか〳〵と駈寄りてコレ吉三樣。とてもこなたの性根魂曇りを磨く此刀。某が手に掛けて我も冥途のお供して。父御の前で拙者めが一分立つる御覺悟と。血相變へて見えければ上人中へ押隔り。詞主に諫は家來の役最前よりも宥免す。腑甲斐ない此法師と末頼みなう侮りて。近頃過

言聞きにくし。出家にも佛にもなすべき我が親切は。地先にから目に見えぬかと氣色變れば十内も。吉三もはつと感涙の　フシ頭を。下げて渴仰す。地色武兵衞や太左は何とやら小むつかしさにこつそりと。立つて行くを十内は後さまに襟髮を。引攫み引戻し汝等最前親且那を。横濟者の非道のと何者にか聞きたるぞ。眞直に白狀せよ。改めては言はねども若殿樣の御難儀を。身にかぶりたる忠義とは一國に隱れない。出放題なる囈言をようも／＼吐き出したナ。討つて棄て度い奴なれど御出家なさるゝ悦びに。地命ばかりは助くると右左へ取つて投げ。起きんとすれば踏倒し逃ぐる所を又蹴倒し。二十三十五六十腰も脊骨も立ち兼ねて。はふ〳〵逃げて歸りしは　フシ心地よく亦をかしけれ。地久兵衞夫婦も氣味惡くそろ〳〵出づる玄關口。戀に泣く子を引立てゝ母が繰言ねすり言。はて何とせうも言やんな。なり物類なら何にても。たばうて虫は入るまいに魚屋ならねば蛤の。口の開いたは是非ないと呟き。てこそへ立歸る。

中之巻

歌やよ柳。もとの梢の雪ならで。餅搗く宿の梅とのみ。多龍する大根も蕪も。ナホス　フシ千代の諸かづら。フシ常磐堅磐の。交讓木や。橙柑子榧搗栗。昆布串柿商ひの店を其儘蓬萊の。八百や萬の神の餅御藏のかゞみお雜煮の。かちんあたゝけ心見を爰へ取子のひつちぎり。ちぎり解れて戀病の。地娘お七は奥の間に。春をも待たず逝年を惜むでもなし世の中は。スエテ無常と外へ見せかけを。色とは誰も水晶の顧ひの玉を手にかけて。フシ題目繰つて居たりけり。地色仲居の杉は差寄りて。詞一年一度の餅搗に小急々しい何ぞいの。親御樣への意地張りは却つて御身のひしはなびら。地移ろひ易き人心先には忘れてござるやら。最早坊樣に成つてやら。知れぬ相手に義理立は。フシ損な事やと諫むれば。地色聞えぬ事を言ふ人かな心の變る變らぬは。色品數多見盡して濡れの巧者の仇比べ。吉三樣にも我が身

にも戀の手習血に染めし。起請の罪もあるぞかし。何しに仇になるべきと。しやくり上げたる顏容貌愛らしく亦優しくも。重ねて返す言葉なく有樣云へばお道理と。贔屓目にさへ持つ涙　フシ漏れて袂を濡しけり。　地色臺所より親方は杉よ〳〵と尖り聲。　詞おのれは其處に何して居る。泣く子も目開いて泣くものぞ。殊には今日の餅搗が。年寄つた久兵衞や婆が正月祝ふのか。類火に遇うて諸道具も足らぬ中から毎年の。嘉例の通り搗く餅に小米一升減じぬは。生先のあるお七ぢやと子に袢さるゝ親の慈悲。近所隣へ聞えては奢な事と譏るであろ。一門どもも笑ふてあろ。其上に娘に迄すねて貰ふは是非がない。構はずと捨てゝ置け。やがて甑もしまひやげな男どもは隙がない。兩替町の蝶和殿針立の玄伯殿。　地色お出でなされと云うて來い　フシあた面倒なと喚かれて。　地笠も足駄も取敢へず髮さへ今日は結ふ隙の中戸口より呟いて。吹雪を凌ぐ前垂に走り出でたる軒の下。眷も根芹も埋れて。雪重げなる簑笠に臥せる里の子哀れやと。言捨て過ぐる裾を引き。顏差出すは吉三郎ハツトばかりに立戻り。こは淺ましき御有樣如何なる事と抱き付き。　スエテ人目も分かず泣出だす。　詞吉三郎は押靜め。何故そとは怨めしや色故身をば窶す事。如何なる高位高官の古今も同じ事。　地色百夜通ひし少將の雨夜の憂さは知らねども。雪に身内は冷え拔きて顏見ぬ内に消ゆる身と。　フシ泣音もいづれ弱げなり。　詞ヲヽ御尤〳〵。こちらも同じ憂き思ひたつた今迄言出して。二人が泣いて居りました。　地色幸ひ表に誰もないそろりと其處を這ひ入りて。潛を左へ五六間行けばお部屋の緣の下。暫し屈んで居やしやんせお便に行て戻つたら。首尾見合せて雪よりも積る事どもどちからも。云ひつ言はれつさせませう必ずさうと囁きて。　オクリ駈行くへ戀の道橋や。　地色渡りに舟の心地して敎へしまゝに這ひ入りて。土に此身を打任せ釘になりたる手足をば。君が膚に打付けて寢もせぬ内に睦言の。　フシ心工ぞはかなけれ。　地色かゝる折節町の年寄彌左衞門誘ひ入り來る。久兵衞夫婦悅びて。　詞コレハ〳〵何れも樣。珍らしからぬ饗應に却つて御苦勞掛けまする。　地さあさあ奥へと手を取れば彌左衞門打笑ひ。　詞如何にも參る上からは奥へも屋根へも通らうが。序ながら御夫婦へ願ひと

云ふは武兵衛の事。組中と云ひ平生に兄弟よりも懇志仲。俄に不仲な樣子をば聞いてさりとは氣の毒故。どうぞ挨拶致さうと最前武兵衛に云うたれば。ハテ久兵衛さへ合點なら。身どもに別儀ござらぬと結構な返答に。今宵の祝儀を幸ひに跡から是へ見ゆる筈。地押付けがましいやうなれど萬事は我等が貰ひます。御夫婦頼むと云ひければ久兵衛居直りて。詞お心遣ひと申さうか御宿老殿のお言葉を。背くは慮外に候へども畏つたと申されぬ。樣子は定めし何れものお耳へも早入つた筈。私類火の砌には半櫃一つ得退けずに。やう〳〵寺に隱はれ二度お町へ立歸る。始末しがくもない時節彼の武兵衛が尋ね來て。金二百兩膝に置き預けるでもない遣るでもない。普請の用に立てゝやる手廻し自由になる迄は。二百年でも待つ金子手形取るにも及ばぬと。投げ出されたる嬉しさに思慮分別も入らばこそ。忝いと戴いて初の如くそこ〳〵迄。斯樣に普請致せし事一門よりも大切な友達仲と悦びしに。十四五日も以前の事それなる太左殿挨拶にて。娘お七を所望とある。夫婦の者は猶以て滿足に存ずれど。如何なる事か娘めがふつ〳〵否と云放すに。親子ながらも此事は曲げて曲がらぬ道理故。其段返事致したる明けの日よりも金子をば。戻せ〳〵と五度三度毎日毎日立てせがみ。金子が無くばお七をば。吳れるか有無の返事をと無體至極の使立て。地色如何に貧なる久兵衛とて賣買にする娘ぢやと。見立てられたる無念さがどう堪忍がなるものと。スエテ聲打震ひ腹立つる。詞彌左衛門頷きて。段々至極仕つた。武兵衛のが不屈ぢや。そりや身どもでも堪忍せぬ。しかし斯うした事もある。沙汰に及んだしはん坊親の病氣に人參を。盛らぬやうなる慾者が二百兩と云ふ金をば。手形もなしに預けたは心から底から息女をば。欲しいと思ふ餘りの事。賣買にせぬ證據には其節わけも云出さねば。侮ると言ふものでもない。それに兎や角意地張れば證文のない金子故。待つてとも言はれぬ義理。とあつて折角普請した家を賣らすも笑止なり。此入譯を篤くりと言ひ聞かせたらお七にも。地色合點が無うて何とせう。平に〳〵と物馴れに言ひ廻されて夫婦の者。兎角の答言ひかねて。フシさし俯向いて居る所へ。地色武兵衛はじろりとした顏でつか〳〵とのし上り。詞何れもお待ち久しかろ。横

山殿會ひませぬ。小栗が今宵の參會に毒など盛つて給はるなと。地色かさにかゝつた言分をむつとはすれど是非もなき。金に捲かるゝ苦笑ひ乾の隅へいざ〳〵と伴ひ。奥に。三重へ入りにける。地色お七は炬燵に假寢の夢何とやら襲はれて。ふつと起くれば勝手には三方土器束熨斗。母は銚子に蝶々の折据付けて忙しげに。フシ持ち行く奥の高笑ひ。地色合點の行かぬと見ろ內に丁稚の彌作取肴。手に持ちながら差覗き。詞コレお七樣嬉しいか。否の應のとあるとても親と銀には肩骨が。おれもちつくりあやかり度い。吉三樣の聞かしやつたら胸の火が燃ゆるであろ。燃ゆる序にお前程火に緣のあるお方はない。火事故寺で徒し火事故今度の嫁入し。地脾の臟强い男持ち雲雀の樣にならんしよと。オクリ笑ひて〳〵走り行きにけり。地色お七は覺えず聲を上げ。ナウとゝ樣かゝ樣怨めしい。わしが心にどの樣な行かれぬ義理がある事やら。親子の中で問はれずば人傳にても聞きもせず。死ぬるといやと云ひ放す。事を好みしなされ方娘を一人捨てるのか餘りに慘い心やと。スエテかつぱと轉び。泣く聲が。地色洩れて誘ふ緣の下吉三は顏を差出せど。姿は流石隱れ簑隱れ笠なら抱付いて。聲をも立てゝ泣き度やと。フシ足摺してこそ居たりけれ。母は奥より。走り寄り。地色暫く泣いて云ふ樣は。合點の悪い娘やな。詞此身も一度は若盛自分に花もやつて來て。惚れた惚れぬの術も知り。器量の好いと悪しいのは老の目にさへ見ゆるもの。地そなたのが皆尤も故いやと言やるを無理にとは。今日迄言はぬ兩親が慘いとは言はれまい。詞世が世の時であるならば。假令そなたが合點でもあんな男を持たさうか。器量發明揃うたる婿と並べて見ようため。分に過ぎたる二十荷の簞笥長持襟數を。地恥かしからず取揃へ蚊帳は手織と急がしき。中にみづから機上げて織り調へし物迄も。類火にあだとなりたるは因果な男に焦げ付いた。先生よりの奇緣ぢやと。フシ思ひ諦めくれよかし。地ならぬとならば此家を銀の代りに突出して。出て行く分は構はぬが親の難儀を靡ず。思ふ人には添はれまいよし添ふとても出家をば。詞引落したる罪科は閻魔の廳に就けられて。火の車にて迎へられ等活地獄の火の中へ。生きながら嵌められて煙の下に其人を。地戀し床しと叫ぶとも甲斐なきのみか夫

迄。奈落の底へ落すのが何心中になるものと。　スエテ威しつ。又は賺すにぞ。　地お七はあどなき心から涙の顔を振上げて。暫しも君に添ふならば此身は縦へ生きながら。火に入るとても厭はぬがいとしい人が永沈へ。沈むとあるは悲しやとおろ〳〵するに力を得。母はなほ〳〵口説立てそなたの返事次第にて。忽ち夫婦は袖乞ひの果は野の末山の奥。飢ゑ凍えて此世から餓鬼道の苦を見するのも。たつた一つの胸の内孝行な子は佛神の。　詞憐みありて後々は願ひの樣になるものぞ。世間の掟は夫をば大事々々と敎ゆれど。顏も心も憎體なる武兵衞に添ふは世界の義理。飽かるゝ樣に身を持ちなしや。何時去つて遣すとも添しと請取つて。其時こそは打晴れて好いたお人に添はせて遣ろ。親の難儀に暫しの勤をすると思ふなら。吉三殿の目の前で帶紐解いて寢るとても。淫奔とは思やるまい。　地合點がいたらあいと言やあいと言やとて撫で摩り。初心な心一つにて胸の内が捌けまい。追付け杉が戻つたら母が無理か。道理か。談合して返事しや。我が身は奥へと立ちながら心許なき親心。鋏剃刀櫛筥の。　フシ中を探して持ち出づる。　地お七は更に夢現何か定めんなか〳〵に。消えなば消えね玉の緒のかゝりとだにも其人に。知らせて後に死にたやと。障子一重を關の戸の。明くればやがて逢坂の。　フシ道とも。知らず泣き盡くす。　地色吉三郎は羽拔鳥手も足も無き心地して。やうやうそつとにじり出で。涙を簑に押拭ひつく〳〵と。思案して。母のつど〳〵言はれしに一つとして無理はない。　詞嫌とも應とも返答のないは道理ぢやことわりぢや。必ず〳〵怨みはせぬ嫁入するも我々が。薄き契りも過去よりの定り事と知らずして。　地うか〳〵何しに來た事ぞ親の命又師の目をば。暗まかしたる天罰の忽ち當ると言ふ事を。今といふ今身に覺えた。あら勿體なや。　フシ怖しや。立歸つて明日は發心するぞふつ〳〵と。おれが事をば思やんな。こちには忘れ果てたるぞや。さはいへ今宵來たと云ふ。事ばつかりは知らせ度い納めに顏がにし〳〵と。見度い事やと這ひ寄りて障子覗けば我が影の。若しや勝手に見えんかとそつと退いては又立寄り。杉は何とて戻らぬと　スエテ又さめ。ざめと歎きしが。　詞ハア是も亦誤つた。お七には早や武兵衞とて親の許した男あり。　地目を盜むのは正眞の間男も同

然よ。叶はぬ事をくど〳〵とよしない浮名濡衣の。重きが上の小夜衣何の簑笠入らぬとて。左や右に脱ぎ捨てゝ。涙のつらゝ玉霰。　オクリ袖を〳〵翳して出でて行く。　フシ斯くとは如何で。　地白雪の。道踏み分ける高足駄。杉の心のわくせきと行違ひたる取形も。縁の薄さに見紛ひて内を覗けば夫婦共。勝手に見えずよい首尾とやがて立寄る縁の下。簑笠取つて是はさて。仲人は宵の程。最早祭が渡つたと障子明くればやれお杉。悲しい事が出来たはと　スエテ袂に縋りて。泣き出せば。　詞イカニモ〳〵さうであろ。もう何ぼ程むつかつた。　地お脈見ようとじやれかゝる。　詞エ、面白さうに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の叶はぬ首尾になつたもの。脈が良うてもおりや死ぬる。死なせてたもと塞き上ぐる。　詞ハアどうやら拍子が違うたが。まあかの人に逢うてかえ。ナニかの人とは誰ぞいの。すりや未だ御存じないさうな。吉三様に逢ひまして爰にござれと敎へたる。所に簑笠ありながらお姿は見えませぬ。　地人が見付けて去なしたか但しわしを待ち兼ねて。歸り給ふか氣遣ひなと其處よ此處よと尋ぬれば。お七も共にうろ〳〵と。彼方此方と見廻せど。其甲斐もなき簑笠に。ひし〳〵と抱き付き。　フシ暫し消え入り歎きしが。　地色稍あつて云ふやうは。　詞いやいや人が咎めたでもそなたが遲い故でもない。奥には今宵婿人の早や盃の取結び。かゝ様最前爰へ來て様々の御意見を。否とも應とも得云はずに泣いてばつかり居た故に。　地それが心に障つてがなお歸りあつたものであろ。間のない事ぢや追ひ付いて呼びまして來てたもらぬか。これなう頼むと手を合す杉は聞くよりえせ笑ひ。　詞何がさうした事ぢや物歸られしやれいで何とせう。親御であらうが王様の勅諚にても否なれば。否と云ふのが戀の意氣。朝晩泣いてござつたは人目威しの僞りよ。　地さうとは知らで此事を取持つ日からお二人の。如何なる御苦勞遊ばすとも何處迄も引添うて。奉公せうと思うたはよしなき案じ過しをした。わしも一所に水臭い者と恨みであらうもの。其中へは行かれまいもう今頃はお頭が。丸うがななつてあろ。お前は明日から笄に結うて嫁入の御稽古あれ。男は持たず迫めてまあ寢て花やろと立つて行く。冥途の坂の腰を押す　オクリ言葉と〳〵後は悔しけれ。　地色お七は内の者に迄恥しめら

れてしを〳〵と。如何樣わしが惡かつたつい否々と云うたらば。お嬉しさうな顏を見て今頃は寢て語らうに。どう狼狽て泣いては居た側からさへもあのやうに。愛想盡かせば其身には嫌やお腹が立つたであろ。言譯せうも詫びやうにも最早お出ではあるまいし。文も屆けてくれまいし賴みも綱も切れ果てた。あら懷しやと。戀しやと。立つて見居て見眺めやり移り香殘る簑を着て。笠も被つて此樣に。しよんぼりとした形をして爰につま待つ水鳥の。翼にあらぬ簑笠は仇の形見よ取るも憂し。脫ぎも遣られぬ袖の雨。着て見ては泣き捨てゝは泣き。爰に歎けば座敷には フシ三國一と言ひ囃す。地婿とは憎や穢はしやそれ故にこそ相思ふ。仲をおのれに引裂かれた我が夫戻せ呼び戻せ。さなくば寺へ連れて行け出家落して生きながら。火へ嵌つても大事ない。逢ひ度い見度い行き度いと。謠形も亂れ氣も亂れ。オホフシ亂れ心の。あどなくも家が燒けたら寺へ行き。又逢ふ事のあらうかと。ふつと付いたる出來心。オクリそろり〳〵そろりと。フシ這ひ寄りて。炬燵の懷を四つ五つ簑に包み小袖にて。上を引卷きうろ〳〵と震ひ上るや箱梯子。三惡道の通ひ道。二階は地獄の入り口。鬼が責め來る身の因果廻り。くる〳〵〳〵〳〵車長持戸棚の上。此處か其處かと見廻して。ほいと投ぐれば戀風に我より。先へ。三重燃るらん

下之卷

フシ罪科の。ごもく所を牢といふ文字は戀路の穴冠。地繫ぐや牛のお七こそ今日火刑と町々の。役人夜番柴薪歎きを爰に持ち運ぶ。煙はいづれ變らねど。フシ哀れはいとゞ增りけり。地色母は今日さへ牢の飯持つ手もたゆく足弱く。道も涙に見えねども我が手づからに煮炊きせし。物と思はゞ暫くも添ふ心地して嬉しかろ。自らとても此椀を手に觸れたりと聞くならば。それをお七と抱きかゝへ逢うた心と樂しみに。漸く牢屋に辿り着き門ほと〳〵と音づれて。フシお七が飯と云ひ入るる。地番の者の聲として。詞今日のお上の書付にお七が養ひ入らぬ筈。持つて歸れと云ふ聲

も。地色權威をかうに木で鼻を。こくる下部もフシ所からぞつと身の毛も立戻る。地色向ふの方より久兵衛は歎きに輕いおもひとも。いづれあやなし暫くも宿に一人は居られずと。よろぼひ來たる老の杖。詞ヤア嘆戻りやるか。ナントお七は機嫌よう。物も食うたか進んだか。どうぢや〳〵と尋ぬれば。サレバイノ聞かつしやれ。あの内でさへ義理じゆんぎ振舞でもあつたやら。今日は御飯が戻つたと。地云ひも果てぬに久兵衛は我を忘れて大聲もスエテわつと叫びて。伏し轉ぶ。地女房は取付いてけたゝましや何事ぞ。樣子が早う聞き度いと。フシ縋り責むるぞ遣瀨なき。詞ハテ泣くとて別の事ぢやない。可愛い奴と思ふから思はず知らずの落涙ぞ。地さあ去にましよと包めどもイヤ〳〵こなたの言葉の端。如何にとしても氣遣ひな。地隱すも事による物と手を取つて引留むれば。久兵衛包むに力なく。流石はそちは女の身。樣子を知らぬは尤ぢや。詞總て窄舍と云ふ物は。殺さるゝ日は大法であなたより扶持が出る。地お七が命も今日限り。あれ見やそこな柴薪。若木の花を生きながら煙と成すは胴慾と。立ち寄つて杖振り上げ。敲いつ泣いつ現なき。母はあまりに興覺めて泣くも泣かれずうろ〳〵と。頭是も無しに爲た事を何故お町衆は只管に。詫事をして給はらぬ。代官樣も了簡のないは餘り胴慾や。頼みを掛けし日親樣法華經の功力にて。燒けたる鍋は空に飛びお命恙無かりしとや。夫婦の者が年月に袂の下で敎へたる。お題目の力にて若しや燒けずに戻らうか。さもなか母けどうせうぞ八歳の龍女樣。雨車軸してたび給へ國土の内に何時迄も。火と云ふ物の無かれかし世界の人の恨みにも。母には罰が當るとも娘一人が助からば。スエテ情なしとは思ふまじ。地三年四年前よりも仲人が來てあちこちと。似合ひの緣もあつたれど。人手に置くが氣遣ひさに入婿取りて何時迄も。石に根繼ぎの寵愛が過ぎての今の苦しみを。よく見覺えて世の中の娘持つたる親御達。縱へ如何なるいたづらをも見逃しにして置き給へ。我身は懲りて悔みても。歸らぬ事が淺ましやと。大地にどうど打伏してフシ消ゆる。ばかりに。見えにける。詞久兵衛は差寄りて。ヲヽ道理ぢやさりながら。假初ならぬ科なれば。代官樣のお慈悲にも。町衆の詫び事も叶はぬ事と初めより。諦めながらくど

くどと我も迷うて朝晩に。法華の數珠を掛けながら愛宕様の方へ尚き。地色娘が沈む火の難をどうぞ救うて給はれと。謗法とは知りながら。フシ頼みし事の恥かしや。地子は三界の首枷とて。現世未來を取外す。悲しき老のしまひやと。同じく側に伏轉び聲を。立てゝぞ泣きにける。地色かゝる所へ人夫ども柱を擔げて口々に。詞何と不便に思はぬか。まこと譬に云ふ通り花ならば初櫻。月ならば二夜どり。饅頭の様な手足をば。在所で團子燒く様に火にくべるのは惜しい事。それに相手の若衆めは何をしてけつかつて。地色今日が日迄に尋ね來ぬ因果はお七一人ぢやと。心無き身も哀れ知る。フシ目を擦りてこそ通りけれ。地色夫婦は見上げ見下して世に庇弱な娘をば。あの柱へくゝり付け四方から燒き立てゝ。阿鼻焦熱の苦しみをまじ〳〵と見て居られうか。共に灰ともなり度やな可愛の者やさりとては。火をつけずともどうぞ又。外に思案は出なんだか。駈落するといふすべを。杉は心も付けずして。フシ我から。身をや焦すらん。地年寄りたりし我々が。身は去年にも相果てばかゝる憂目は見まいもの。今は死なうも生けうにも。有るにあられぬ世界やと。足手顫はし目くるめき　スエテ性根なきこそ。道理なれ。地色所へ年寄彌左衞門涙片手に駈け來り。詞ヲヽ悲しうござろ尤ぢや。心一杯訴訟もするお上にもどうぞして。助け度う思召し言譯の仕様をば。くゝめる様にのたまへども年の行かぬ悲しさは。吉三様に逢ひたさに火をつけましたと有様に。云ひ放せば是非もなく。法の如くにお仕置を悔みても返らぬ事。それに就いて武兵衞めが斯うした中に取交ぜて。二百兩の金子の儀たつて御訴訟申せし故。委細御詮議遊ばされ此事故に此度の。科人も出來たりと殊の外の御憎しみ。只今牢へ打込まれ右の金子は久兵衞へ下さるゝとの御上意ぢや。地色せめてはそれを力にして歸らしやれいと引立つれば。地久兵衞は手を合せ金子に念はなけれども。娘を夢目に沈めたる元の起りの武兵衞めが。牢へ入つたと聞いたればいづれ力が付いたやら。ちつと眼が見えますと悦ぶも又哀れなり。地色女房は聲を上げ此吉三めは如何なればお七が最期我々が。歎きを餘所に見ず知らず尋ね來ぬこそ怨めしけれ。行方も知らぬ者迄も。口々云うて誹るのが。耳へ入らぬか聞えぬか。娘の敵胴

慾者。情知らずと　フシ泣き惑ふ。詞久兵衛は押し鎭め。愚の事を云ふ人かな。お七が爲に正眞の敵といふはこち夫婦。學問立つる家でもなし武士の一門持ちもせず。僅な八百屋商ひして。娘が徒らすればとてさして恥にもならぬ事。お寺へ云うて早速に吉三を婿に貰うたら。地今日のつらさはあるまいに。小家一軒建てうとて。厭がる緣を結びし故。慘い死にをばさするとて。最期に親を怨めうもの。千部萬部を讀んだりと　此方夫婦が弔ひは。露程も受けまいが。詞戀しと思ふ吉三殿一遍の題目も。フシ草の蔭にて悅ばん。地色扨又此場へ見えぬのは猶以ての情ぞや。お七が吉三の顏を見ば心亂れてなまなかに。臨終の迷ひとなり未來の程も不便なり。願うた後生はなけれども見物群集の人人の。御回向の功德にて佛にもなれかしと。思ふもせめて親の闇。あじき涙の諸聲に　フシ餘所の。袂も濡れにけり。地色早や刻限と相見えて拔身の鎧のひら〳〵と。朝日まばゆく輝けば夫婦は共に叫び出し人目も恥も警護をも厭はず構はず駈け出すを。彌左衞門跡より取付いて諫め賺してやう〳〵と。歸るや夢の浮橋を娑婆と冥途の二道に盡きぬ名殘の袖の露跡へ戻れば先へとて。引かれぬ足の一夜だに泣く音や。三重是を

八百屋お七江戸櫻

かわり歌祭文呼子鳥の。オクリ哀れ。なるかな。合お七こそ。戀路の闇の暗がりに。よしなき事を。仕出して。戀の罪科。ナホスフシわれ一人。かき集めたる。玉箒。あこがれ焦れ行末は。かゝる憂き身をこゝかしこ。見付。見付に。曝されて。日本橋より引かれ行く。見る人袖を絞る人。見返る人も皆人も。柳原野の。つく〳〵し餘所目に餘る涙川。渡り兼ねたる丙午富士の。江戸冷泉煙と。諸共に消ゆる命ぞ。果敢なけれ。首にかけたる玉の緒の。絕えなば絕えね箒木の。長地形見の念珠繰返す守は父の賜はりし一部一卷後の世を。助け給へや南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經。歌何時しか君と馴れなじみ。變るまいぞや變らじと起請を。書いて取交し。小指を切りて。ナホスフシ血を絞り。互に

語る睦言に。二上り祭文さりし御見の夜の雨。殿御待つ間の疊算。逢ふ夜逢はぬのよ。いさよ恨みても。外に惡所は。誓文と。オクリ仇し。男の。ナホスフシ仇事や。地貧の盗みに戀の歌三十字一文字書き習ひ。湯島に懸けし松竹梅本郷お七と記し置く。十一歳の筆の跡見し人あらば私の。形見と思ひ一遍の御回向頼み奉ると。顏差入る懐の。内より洩るゝ振袖に溜る。涙ぞ哀れなる。フシ身は人くづと。言はゞ云へ。笑はゞ笑へ一筋に。思ひ初めたる戀なれば。たとへ此身を貫かれ。骨は粉となれ灰となれ。スエテ魂は此世に留りて。影に附添ひ身に移り。小オクリ二世もへ三世も我夫と手に手を取りて蓮華乘。説經カヽリ法の纏切れ果てゝ。我と火に入る夏の蟲。焦死とは。此事か。竹の子故に迷ふ親。冥加も知らず恩知らず。如何に若めといへばとて。氣儘に心持ちなして　オクリあられ。少きしめじとは神も佛もしらまゆみ。ナホスフシ三つ葉四つ葉の。嫁が萩。脛も現はに三田の郷。スエテ亂れし髪と諸共に。隨喜の涙をちこちの。二上り祭文眺めは。爰も鳥の海。小浪寄する。品川や。いよ。いよ。いよ。濱。に。合入江の海人小舟。見えつ隱れつ。一霞の。あれ。から。先を。見渡せば。吉原雀口々に。科のよしあし夕時雨。戀の邪魔する。男こそ。色の命をせたしゞみ。我は佛になりもよし。オクリ振りもよしなやよ。いさよ戀故に。命の峠。フシ今暫し。暫しと留むる人もなく。心も駒も忙しげに行く道柴も露ぞうく。引く足なみの數盡きて。爰ぞ名にふる鈴の森最期場にこそ。着きにけれ。

地色かゝる所へ吉三郎思ひ切つたる白裝束。群集の中を押分け〳〵人目も恥ぢずつか〳〵と。立寄らんとしけれども。警護の武士に隔てられ。泣く音ばかりの問ひ交し我故かゝる罪科は。淺ましの有樣や　スエテ此身も共にと焦れける。地色お七は顏を振上げて愚にござる吉三樣。我が心から爲す業を少しも悔む事ならず。逢うて死ぬれば今は早や。フシ心にかゝる事はなし。地色お前は命目出度うし。御出家なされ亡き跡をよく〳〵弔うて下さんせ。言ふ事とては是ばかりはや〳〵お歸り遊ばせと。名殘りに心亂るれど。人目を恥ぢて潔き。言葉の中に曇り行く目許に。哀れ

殘すらん。吉三も涙押し隱し我身をかばふ心ざし。喜ばしやと振返り役人に手を突いて。詞科の起りの本人は私にて御座候。地色急いで彼をお助けなされ我等をお仕置下されよと。たつて申せど役人は。詞愚や一度代官所で詮議極まる科人を。我が計ひに叶はぬぞ。地死なんず命をあの者が望みの如く出家して。跡弔ひて得させよや急ぎ立ち去れそれ科人。時刻移ると下知すれば。吉三も今は力なく生てゐられぬ我が命。いざ〳〵冥途の道連れに我先立つて待つべしと。腹一文字に掻き切つて露と消に行く露の世や。お七は今年十六歳吉三郎は十八の花や。月雪郭公なれも冥途の友となる。戀に果して武藏野の草の緣と色深き。浮名諸國に擴ごりて。語り傳へる末の世に哀れは。盡きぬ物語。

八百屋お七終